研修名　幼児教育・保育
平成３１年２月２８日（木）１０：００～１２：３０
講　演　「遊びを通して学びに向かう力を育む環境構成」
講　師　　社会福祉法人わこう村　和光保育園　鈴木　まひろ　氏

１講演要旨

1）保育（者）の質を高めるうえで保育者が抱える課題

①これまでの保育・・・役割で関係を分割

先生→指導する人（保育者が考えた価値観を一方的に伝える、させる。）

生徒→指導される人（子どもはそれを受け取る、従う。）

⇩

そのとおりにやれた/うまく出来た/出来なかったかの〇か×の評価におちいりやすい。

②レッジョ・エミリアのペダゴジスタ（地域を統括する指導教官）の言葉

「伝統的な学校というのは、教えることを主としている。知識をどのように次の世代は伝えるかということだが、これまでの教育は一方的であり、教育者から与えられるものだと考えてきた。

学ぶ者と教育する者とがはっきり分かれてしまっていて、主役が先生になっている。

これまでの伝統的な教育では、どのような事を教えるのが正しいのかを考え、前もってきめられたプログラムで始められるもの、そして、そのプログラムに沿って、予定通り展開される活動であった。」

（ジャパンスタディー2014.11）

2）「勉強」と「学び」の違い

「勉強」・・・・必ず「教師」がいる。

・必ず「正解」がある。

・「正解」が出せるように練習する

・「正解を出す力」＝「能力」を身につける

「学び」・・・周囲に同時多発的に起こった面白そう（何故？不思議も含む）に出会うことで、「なりたい自分」が見つかり、周りの支えを持ちつつ、自ら学び、自らを育てていく。

→主体的学び　学びに意欲を持つ＝主体的に生きる

⇨ 能力はそれを使う場所があって発揮される

身につけた能力とそれを使える生活が大切。

［知っていることが試せる環境があり、子どもが自由に扱える道具が身近にあることが重要。］

３）レッジョの新しい教育観

・子ども達自身が知識(学び)の主人公であり、教育活動の中心であり、子どもたちと先生、あるいは子ども同士の関係性で生まれる知識(学び)が大切である。

・子ども達と一緒に、何を学ぶのかを考える。(子どもから始まる)子ども達から考える。子ども達の研究・探索を受け入れることから始まる。

・そもそも学びとは、きわめて偶発的なものであり、これまでの経験に基づくもの、子ども達との対話の中から生まれてくるもの、経験に参加する者たちで決められていくものだ。(ジャパンスタディー2014.11)

⇨「主体的で対話的で深い学び」の理念に通じる

４）主体性を育む条件

・応答的・対話的に向き合う（声を聴く・聴き入る）

・やってみたい、やらない、やめるも含んだ「自己決定」ができる

・遊びの生活の中にこなせる道具がたくさんある

・同時多発的に面白そうが起こっている

・子ども自らの育つ力に信頼を置いて学ぼうとしている　育とうとしている　その心持ちと共に生きる

⇨「主体性」は、子どもだけのものではない。大人も生活を創る主人公として「子どもと共に」の「今」を創り出す

・大事にしたい保育・・・一人一人が生活者として主人公として自らを輝かして生きることを応援する保育

２　感想

今回の研修に参加させていただき、改めて保育者だけでなく、子どもとも保護者とも、語り合える雰囲気が大事ということを感じた。また、子ども達が成長していくうえで大切な「学び」について、保育者はどのように考えていく方が良いのか、また、子どもの主体性を育むために、どのような取り組みをしていくことが良いのか、振り返るきっかけとなった。

（記録　善法保育所）